

火星

平成二十三年七月号



七曜抄 (七)

山尾玉藻

男同士とは花桐を遠見にす

咲きつのであることのしづけき蜜柑山

捨て苗にくにうみの月上りけり

雨つぶの愛染かづら祭来る

峰雲へ傘屋が傘をひろげけり

金魚田の匂ふ二階へ通されし

東日本大震災

泣きむしの爺に少女の団扇風

羽抜鶏二上山へ羽搏ちけり

雲の峰仰ぎて齧る蛸の脚

応はねばならぬ扇をつかひけり

太白星

柳生千枝子

花の朝手押しポンプが水を吐く
紙袋パンと鳴らしてチューリップ
穴出でし蟻にて既に忙しき歩
猫の恋夜中に月が降りてくる
恋猫や遅き月出る瓦屋根
脚長く提げ啓蟄の蜂飛び
春愁の指鍵盤にふれてみる

杉浦典子

すぐ止みにけり三楹の花の雨
山茱萸の咲いて埴輪の耳飾り

遅き日のえびいろの網繕へる
かいつぶり潜きし春の虹消えし
花の種買ひ海ゆきの切符買ひ
綿蒔きし夜の指先のしめりかな
骨納めの遅れてをりし桜薬

浜口高子

被災地へ荷造る桜押し花に
はんざきの水を柳絮の消えてまた
巫女の灯の渡り廊ゆく春時雨
クレソンの花のかたまり溶けさうな
孕み馬音立てずぬし昼の闇
雲雀東風額の髪のすぐ垂るる
ひばり三羽それぞれの空あるらしく

火星作品

山尾玉藻選

蛇出でて人ごゑに舌つかひけり
明石戸栗末廣

春昼の頭より入る秘仏の間

涅槃図の真つ正面のゆらぎかな

菜種梅雨ゆすつて納む兄の骨

どの田にも水ゆきわたる五月富士

もどるなり出でゆく猫やつちぐもり
大和郡山城
孝子

もひとつのぶらんこ揺れてゐる月下

眼の前を鳥のよこ顔花疲れ

奈良町の濡れて歩きぬ花祭

杉苗の丈揃ひたる端午かな

谷底に耳聡くゐし初ざくら
神戸深澤
鱻

結界に面売りのゐる山桜

桜守風へ親指ねぶりたる

年寄の額の広うて春時雨
松の芯松に位のありにけり
大桜より冷えてきし男山
大甕のひと枝で足る桜かな
大鉤を提げて八十八夜かな
切り岸の海老根へ伸ばす湯の手足
ひろめ屋の鬻に桜の蕊降り
涅槃図へ媼が躡り寄りにけり
椀底の砂をゆらせり花疲れ
練稚児のひとり背高き仏生会
うぐひすに山見渡せる葉売
深吉野の凹みの水に蝌蚪の紐
衣擦れのしさうや蛇の衣吹かれ
蝮酒飲んでメコンを渡りけり
待ち合はす茅花流しの葵橋
盛り塩ふたつ一条の滝の前
万緑や大きなガラス運びすぐ

八幡天谷翔子

箕面西村節子

八幡坂口夫佐子

選のあとに

山尾 玉藻

蛇出でて人ごゑに舌つかひけり

戸栗 末廣

実際に穴を出て来た蛇が人間の声を聞き留め、何らかの目的をもって長い舌をべろりと出したのではない。そう捉えたのは、人間の蛇に対して抱く陰の意識が強く働いた所以である。我々は蛇の挙動を好奇の眼をもって眺め、大方は一方的に毛嫌いする。「人ごゑに舌つかひけり」の不気味な発想も作者（人間）の主観に成るものであるが、それを蛇の行為に置き換えたところで成功している。同時発表作へ春昼の頭より入る秘仏の間、「頭から入る」も「春昼」のもの憂い感を感じることとなる。

眼の前を鳥のよこ顔花疲れ

城 孝子

「目の前の」ではなく「目の前を」であり、作者の間近を鳥が飛んで横切ったのである。普通このような場合は羽音が姿にこころ留めるが、作者の眼はしっかりとその鳥の顔を捉えた。そのことと「花疲れ」に関わりはなさそうだが、どこか納得させる。「花疲れ」とは「桜中り」とでも言えるもので、桜から感受した昂ぶりで常にはない感覚が生まれるのかも知れない。へもひとつのぶらんこ揺れてゐる月下、間接的表現

の「もひとつの」の手立てがなかなか巧みで、春宵の艶やかな一景をさりげなく描いている。

谷底に耳聴くみし初ざくら

深澤 鱧

一花二花と咲き初めた「初ざくら」はか細い優雅さを漂わせる。そのデリケートな様子を眺めながら作者の聴覚も自ずと敏感となった様子である。まして「谷底」では山音や川音、とりどりの鳥声が身に沁みて、いつしか我が身も大自然の一存在とまで感じられたのかもしれない。へ結界に面売りのゐる山桜へ、同じ桜を詠んでこちらは晴朗な世界を生んでいて親しみ深い。

大鉈を提げて八十八夜かな

坂口夫佐子

「八十八夜」の候は播種に相応しいとされ、また茶摘みの最盛期でもある。春を惜しむころと夏を迎えるところが交差する候、抽象的に表現するならば静と動潤いと乾きが両々相俟う候と捉えられるだろう。掲句、「大鉈」を提げる人物はこれから山へ入り目的の樹を伐りにゆくのかも知れない。力を秘めた「大鉈」の静かな光が「八十八夜」とよくひびき合っている。へ切り岸の海老根へ伸ばす湯の手足へ、切り岸に清楚な海老根の花が風に吹かれているのだろうが、花と湯船にかかる作者との距離感がなかなかゆかしい。読み手までゆつたりと心癒されてゆくようだ。（以下略）

恒星圈

山本耀子

ポン菓子を買って戻りぬ花筵
堰音に落花しんぼうしてゐたる
春騒雨ヒマラヤ杉の枝庇
かはほりに音なかりけり夕桜
花に沿ひ水に従ふころあり

村上留美子

米澤光子

篠笛の調べにまかせ花筵
白鷺の大屋根に立つ遅日かな
石ころの好きな子を追ふ花の下
春寒し芦原歩く音連ね
園長は門主でありぬ花祭

釣銭の貰ひすぎたり花の冷
横坐りの蹠はみ出す花筵
花の酔袂に煽がれをりにけり
有難うと言うて言はれてチューリップ
コアラ舎の天窗さくら吹雪なる

山田美恵子

蘭定かず子

囀へつつこんでゆく手綱かな
蝌蚪の水サーフボードが跨ぎけり
はなびらのしきりに散りく潮見表
蛇穴出づ来賓席は白クロス
利き腕を包む湿布に春の蝶

子の手よりもらふ貝がら鳥曇
貸ボートひとつ出てる桜かな
草餅を解くやまぶしき畳の目
パン生地を寝かせ花種蒔きにけり
あたたかや入場を待つパイプ椅子

獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

花冷や祖母のベッドのきしむ音
涅槃図の鳥さかしまに哭きぬたり
卒業や裏門出づる二人乗り
赤子抱きをり涅槃図の象の前

西村節子

角曲る度に京の桜かな
鶯にあゆみあやふき木橋かな
教会の畳に立てば鳥帰る
春風の托鉢僧の挟かな

藤田素子

うぐひすの第一声の上手なり
亀鳴くや男にもある更年期
そこにだけ風吹いてゐる夕桜
春ともし老眼鏡なるものをかけ

奥田順子

楠若葉相撲甚句のはじまりぬ
袖まくり上げて川端の雪解風
首塚に瀬音かむさる夕桜
さつきから川を見てゐる新社員

西村裕子

花の夜の川に浮きゆく紙袋
遠山に夕映えのこる鴉の巢
淀川を何度も渡る養花天
ボール蹴る音と泣き声日永し

天谷翔子

仮名文字のごと深吉野の花筏
半分は土になりたる落椿
深吉野の日の射してゐる蛇の衣
サーカスの象の死にたる花の昼

西畑敦子

蟻のぬし牡丹くづれてしまひけり
夕鐘に銀杏は花を零しけり
手の肉刺の父譲りなり春田打
ブランコのペアルックの二人漕ぎ